論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　号

氏　　名　高田　善久

論　文　題　目

The impact of the age-adjusted Charlson comorbidity index as a prognostic factor for endoscopic papillectomy in ampullary tumors

（年齢調整チャールソン併存疾患スコアは内視鏡的乳頭切除術を受けた乳頭部腫瘍患者の予後を予測する）

論文審査担当者　　名古屋大学教授

主　査　　委員　　江畑　智希

名古屋大学教授

委員　　梅垣　宏行

名古屋大学教授

委員　　丸山　彰一

名古屋大学教授

指導教授　　川嶋　啓揮

別紙1　2

論文審査の結果の要旨

今回、内視鏡的乳頭切除術(EP)を受けた散発性十二指腸乳頭部腫瘍(AT)患者236例に対して、予後と関連する患者因子を後方視的に検討し、年齢調整チャールソン併存疾患スコア(ACCI)を同定した。経過観察期間の中央値は52ヶ月で、5年生存率はACCI≦4で96.6%、ACCI≧5で73.5%と有意差を認めた。内視鏡治療のみを施行した220例と追加外科手術を要した16例での5年生存率は同等だった。死亡は17例あり、他病死7例、他臓器癌8例、治療関連死2例だった。ATによる死亡はなく、治療関連死はいずれもACCI≧5であった。ATは緩徐進行な腫瘍でありEPの適応となる早期病変は予後規定因子となりにくいこと、ACCI≧5では偶発症による死亡リスクが高いことが想定された。このことから、AT患者の予後は年齢や併存症を含めた患者因子により規定されるため、ACCI≧5では無治療経過観察も許容される可能性があると考えられた。

本研究結果に対し、以下の点を議論した。

1. EPから退院までの日数は中央値15日(四分位範囲: 11-18)であり、ACCI≦4とACCI≧5では有意差を認めなかった(p=0.855)。入院中に他疾患を6例発症した。ACCI≦4では偽痛風・てんかん発作・結膜炎・誤嚥性肺炎・クロストリジウム腸炎、ACCI≧5では転倒による圧迫骨折だった。併存疾患に関連するものはなかった。EPは手術と比較し低侵襲で治療後のPerformance statusが保たれる点が、併存疾患の増悪や他疾患の発症を回避することに繋がり、ACCIと入院期間が相関しなかった理由と考えられた。
2. 対象患者をACCI値が0~3(低値群:120例)、4~5(中間群:91例)、6~11(高値群:25例)に分けて予後との関連を再検討した。Log-rank検定による5年生存率は低値群96.8%、中間群90.3%、高値群62.8%であった(p<0.001)。Bonferroni法による多重検定でも各群間で有意差を認めた。ACCI値が上昇するにつれて段階的に生存率が低下し、予後を層別化できる指標であることが再確認された。
3. 本検討で満たしたチャールソン併存疾患スコア(CCI)の項目は、糖尿病39例(3大合併症あり10例、なし29例)、5年以内に治療した固形癌23例が多く、次いで脳血管疾患、軽度肝疾患、中等度～重度の腎疾患が7例ずつ認められた。心不全、慢性肺疾患、認知症、白血病、AIDSを有する例はなかった。医学の進歩により予後に影響を与えうる併存疾患は減少し、CCIは時代にそぐわない側面がある。疾患を限定し、重症度や治療方法を反映した新規スコアリングシステムの開発が望まれ、今後の検討課題である。

本研究は、散発性十二指腸乳頭部腫瘍に対する内視鏡的乳頭切除術の適応を判断する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第　　号	氏　名	高田　善久
試験担当者	主査　江畑　智希 副査₂　丸山　彰一	副査₁ 梅垣　宏行 指導教授　川嶋　啓揮	

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1．ACCIと入院期間、入院中の他疾患発症との関連について
2．ACCI値による予後の層別化について
3．併存疾患の該当項目と現代医学におけるCCIの妥当性について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。